

## 8. 1963年度北洋サケ・マスの漁況，生物調査からみた特徴

温泉川洋彦（函館公海漁業株式会社）

今年の日本近海の冬～春期の水温は例年になく低水温であったことが新聞などで報道され、北洋水域の水温が、心配されていた。しかし、今年度出漁前、気象庁の北洋水域の水温資料によると今年度の北洋水域の水温は日本近海とは逆に例年より高めであることがわかった。実際の操業でも昨年水温よりやや高めであった。殊にアリューシャン列島<sup>Ⅱ</sup>付近の水温が高めであった。

以上のような水温状況を基として、今年度の漁況と生物調査からみた特徴を抜き出してみたい（しかし以下述べることの中には、独断すぎる点や偏った見解が入っていて、私の誤解にすぎない点もあるかも知れない）。

一般に冷水性の魚類は春～夏にかけて、産卵行動を起すものが多く、水温が早くから高くなった年は早く産卵行動を示す傾向がみられるという生理的にみても温度が高くなると新陳代謝が活潑になることから産卵行動が早く開始されることが当然予想される。今年度の操業の特徴の最も著しかったのは、漁期が例年になく早かったということではなかつただろうか以下この現象を魚種別にみると。

### マスについて

先ず、マスについてであるが、例年マスが5月下旬から今年度のように、1日当り1.5～3トン（明洋丸総水揚）も漁獲されたというのは珍しいのではなからうか、無論、今年は奇数年で一応、マスの豊漁年ではある、しかし同じ奇数年である1961年の場合でも、マスが混獲されるようになったのは、6月に入ってからである。又生物調査からみた、今年のマスについての特徴を昨年の場合と比較してみると、その最も大きな特徴は雌雄比である。大体に於い

て魚類は雄性先熟である。つまり漁期については、初漁期に♂が多く、漁期後半に♀が多くなるのが普通である。マスはその典型的な例であって、初漁期には圧倒的に♂が多く、盛漁期には、ほぼ♂♀の割合は同じである。終了期には逆に♀が多くなる。今年度のマスは、6月下旬には、♂と♀の割合は既にほぼ5:5に近く、7月の初旬には、♀の方が多くなっているところが昨年の場合をみると7月初旬には、未だ、♂♀比は6:4くらいで、♂の方が多く、雌雄比からみても昨年より今年の漁期が早かったのではないかとと思われる。

#### シロサケについて

今年度はシロは豊漁年にあたり、北水研では水準の低い豊漁年であろうと予想していた。しかし、7月初旬までの漁模様からみると(オリュートルのシロサケについては後述する)5月下旬が少しよかったですだけで、少なくとも豊漁年どころか不漁年とさえ言えるような漁獲である。シロは過去の資料をみると多獲水温がベニ、マスより約1ぐらい低いことから、今年度の北洋水域の高水温がシロサケの産卵廻遊を余程早くから開始させたのではなからうか。

次にオリュートル海域のシロサケであるが、これは沿岸に近い程、漁獲がよかったです。又シロサケの筋子製品の資料をみると、この時期のシロサケの筋子は1級品が圧倒的に多いことから成熟度の極めて高いものが多かったことから、所謂接岸期のシロサケが多かったと推定できるのではなからうか。

#### ベニサケについて

今年度、明洋丸船団は、初漁日から、ベニの好漁に恵まれ、5月25~27日の時化がなければもっと獲れたのではないかと惜しまれた。ここ数年の漁獲をみても、初漁日からこのような恵まれた漁獲は、みあたらない。例年、6月初中旬にみられるような漁獲であった。つまり既に盛漁期に達していたと言うのは言い過ぎであろうか、そしてその後の漁獲は大したことなく、6月中下旬にはもう一山、ベニの漁獲を期待していたが、結局大漁には恵まれなかった。

例年ベニサケでもシロサケでも、漁期の始めに海洋生活年令の多い魚の出現率が高く従って、魚体の大きさも漁期始めに大きく、漁期が進むと共に小さくなる傾向がみられる。そして、又漁獲のよいときは、一般に大きさが揃っている。又、漁期後半には、海洋生活年令の少い若令の未成魚が増えて来るため、魚体の大きさは、小さなものから大きなものまで、ばらばらになる傾向もみられる。こういう現象からも或程度初漁期、終漁期を推定し得るようであるが、これをセルロイド板穿孔による体長組成から今年度と昨年1昨年とを比較してみると、今年度のベニは6月中旬以降になると既に魚体の小さなものが、昨年1昨年に比してはるかに多いことから、漁期の早かったことを思わせる。

#### ギンについて

ギンの出現を今年の場合とここ数年の出現を時期的にみると、例年ギンの出始めは7月に入ってからである。しかし今年の出始めは6月22日となっており、このギンの出始めも例年に比して早い。しかしながら、今年度の本格的なギンの漁獲は、7月24日からであった。昨年度の本格的ギンの漁獲は、7月14日からであった、むしろ今年の方が遅い、これを水温についてみると昨年より時期が遅くなっているにもかかわらず(漁場は昨年より若干ずれてはいるが)1°C以上も今年の方が低いのである。ギンは他のベニ、シロ、マスに比してはるかに高水温で多獲される。従って漁場も南に偏在している。

以上のようなことから、今年度のギンの出現の仕方について、もう一度考察してみると、今年度の操業が始まる前の北洋の水温は例年に比して高水温であった。この水温に促がされて少数のギンのかい游を早めた。しかし、7月頃南から黒潮の前線が優勢となって、ギンの本格的漁獲が始まるところが、今年この黒潮前線は例年になく低水温であったため、本格的なギンの漁獲は遅れたと思われる。――念のため昨年度ギンを漁獲したときの表面水温と今年度の表面水温とを比較してみると次のようになる。

1962年 7/17日 7/18日 7/19日 7/20日 7/21日

46-36N 46-38 46-46 46-41 46-39

169-36E 169-34 169-37 169-22 169-20

11.9°C 11.4 11.6 12.0 12.0

1963年 7/27日 7月28 7/29 7/30

49-29N 49-00 47-11 45-07

173-17E 172-37 169-51 166-05

9.9°C 10.0 10.6 10.5

以上のような特徴の外に昨年と比して特異な現象は、昨年度のギンの胃内容物は殆んどすべてがイカばかりであった。しかも非常に多量に喰っていた、ところが今年のギンの胃内容物は空胃のものが多く、ギンの餌料であるイカの発生が悪かったということが推定され、これも今年度の水温の異常と関連があるのではなからうか。

## 9. 海況漁況について

大和寿男（報国水産株式会社北洋部）

昭和38年度北洋鮭鱒漁場に於ける海況、漁況に就いては、既に水産庁佐野技官始め各社担当者より詳細なる解析があったので、之との重複を避け、唯当社船団の操業せる高緯度北緯61度付近のナワリン岬南方漁場にて見聞せる2～3の事例に就いて、その概要を述べる事とする。

6月中、下旬に於ける南方漁場不漁の打開策として、昭和31.32.34.35年度操業の実績を基として、7月上旬ベーリング海北部に漁場を求めるべ